【321】

氏　名（国籍）	アントワーン・アビ・アード（レバノン）
学位の種類	博　　士（デザイン学）
学位記番号	博　甲　第　4461　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	CONNECTING ARABIC TO LATIN SCRIPT A Visual Conversion of Verbal situation in Lebanon (ラテン文字とアラビア文字の連結　レバノンに於ける話しことばの視覚的変境)

主　査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	西　川　　潔
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	五十殿　利　治
副　査	筑波大学教授		笹　本　　純
副　査	多摩美術大学助教授	博士（デザイン学）	山　本　政　幸

論　文　の　内　容　の　要　旨

■論文の構成

本論文は 6 の章から構成されている。まず第 1 章ではレバノンのバーバルコミュニケーションの実態が語られている。第 2 章では，日常会話等で複数言語が混用される状況を，レバノンの歴史的や地理的状況から，地域の特性を表すものと捉えている。第 3 章では口語を視覚（文字）に置換し得るか，問題点を整理している。第 4 章では問題の解決に取り組み，レバノンとチュニジアで数回にわたって開催したワークショッフの成果をまとめている。第 5 章では実際のデザインに適応し，その可能性を探っている。第 6 章では今後の可能性と課題を述べている。

■論文の目的

今日のレバノンでは，日常会話をはじめ，TV やラジオ，各種広告などにおいて，アラビア語とフランス語または英語が，ミックスして使用されている。会話等において異言語を混合使用している事例は，わが国も含めて珍しいことでは無いが，レバノンをはじめ，中東諸国では，その度合いが著しい。また，国民の大多数がフランス語ないしは英語を流暢に話せ，3 カ国語をはなせる人も少なく無いという。こうした状況はレバノンの特徴である。このバーバル・コミュニケーションの特徴をビジュアル・コミュニケーションにも展開できないかと考え，その方法を研究の課題としている。それは，レバノンの文化的アイデンティティに貢献できると著者は考えている。

■論文の方法

日本語のたて横自由な文字組みについて調査し，また，アラビア文字の伝統的カリグラフィーやアポリネールや未来派の詩の自由な文字の配置等を研究した。それらをとおして，リニアルな文字組以外の可能性や，文字の連結方法について探っている。一定の方向性，可能性を把握した段階で，レバノン及びチュニジアのデザイン系大学の学生にワークショップを行い，筆者のアイディアを伝え，それを応用，発展してもらう方

法をとった。つまり，本研究は実際に日々複数の異なる言語を混合して用いている国の若者自身に，考えさせる方法をとっている。そこで得た様々な事例から，レジビリティや美しさそして書きやすさ等に着目し，整理，分析した。

■論文の結果

結果はアラビア語のアルファベット 28 文字とラテン語（フランス語）のアルファベット 26 文字（大文字と小文字で 52 文字）のそれぞれについて，たて組横組（筆頭と末尾）の連結方法を考えている。その結果，合計 2910 種の連結文字を考案し，実際の適応事例を制作した。これによって実際にフランス語の単語とアラビア語の単語を繋ぎ，かつ一定のレジビリティも確保できることを明らかにした。また文章も 1 行ごとに行頭ないし行末に連結文字を用いることで，比較的問題なく繋げることができることを示した。フランス語は左から右に書き（読み），アラビア語は右から書く（読む）ため，いわゆる牛耕式（ボストロフェドン）の文章となるためである。

■論文の考察

アラブ諸国においては，レバノンのように 3 ヶ国語がミックスして使用される国の他，英語またはフランス語とアラビア語がミックスあるいは併用されている国が多い。本研究の，異なる言語を一定のルールのもとに繋げてしまうアイディアは，これらの国々においても適応可能であると筆者は述べている。それによって国や地域のコミュニケーション方法に新しさを加え，文化的な意味においてもアイデンティティを強めることができると述べ，論を閉じている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の評価は極めて難しい。2 ヶ国語，3 ヶ国語の併行使用，または混合使用する状況をどのように見るかにかかっている。つまり言語の混乱と見るか，特徴と見るかである。

レバノンはフェニキア人の故地であるが，古代以来アッシリア帝国，ローマ帝国，中世にはオスマン帝国のイスラム圏に統合され，20 世紀に入り第一次世界大戦後はフランスの委任統治下に置かれている。また，宗教的には，キリスト教のカトリック，プロテスタント，ロシア正教，イスラム教のシーア派，スンニ派など各宗教宗派が混在している。時には，これらが対立し内戦も起き，現在も，内戦ではないが，イスラエルとイスラム系ヒズボラとの間で紛争が続いている。しかし，歴史的にはむしろ多様な宗教や言語が軋轢なく共存してきたと言えよう。その理由の一つは，レバノンはいわば都市国家的規模であり，古来よりアジアとヨーロッパを繋ぐ交易上の重要な商都としてあり続け，多様な言語や文化が交錯する地であったことが考えられる。

このような背景から，アラビア語とラテン諸国語をまぜて使用するレバノンの日常口語を視覚的に定着させようとする，本研究の試みは，単なるタイポグラフィーや書記法の枠に収まらない文化的意義が見えてくる。テキスト（長文・本文）を組むには，まだ研究は十分と言えなく，また，タイプフェイスデザインの観点からは，殆ど評価の対象にすらならない。にもかかわらず，大胆な提案は多くの人の関心を呼んだ。2005-6 年の間，計 6 回，5 大学においてワークショップを開催し，参加した学生は 100 人を超えていることからも，それは伺える。また，グラフィックデザイン的には，用い方によって極めてインパクトが強く，興味深いコミュニケーションの一方法と考えられ，広範囲な活用が想定される。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。